

古き歩みを誇りに 新しい七尾へ

能登畠山家開統600年を迎えて

城山と七尾城跡

四季折々に、それぞれの彩りを見せ、訪れる人々を楽しませてくれる城山。

その城山に今から500年程前、戦国時代の大名として170年間能登国を治めた畠山氏の居城として七尾城が築かれた。

巨大な規模と要害を利用した築城技術は、国内でも屈指とされ、標高約300メートルの本丸跡からは、七尾湾や能登島、奥能登方面が一望でき、眼下には七尾市街地が広がる。

天正5年(1577)、9月15日に越後国の上杉謙信に攻められ落城するが、謙信は七尾城からの景色を見て、「聞きしに勝る名地で、賀越能(加賀・越中・能登)三方国金目の地形といい、要害は山海相応し、海や島々の風情も絵にも描け



本丸跡へと続く石段

ない景勝である」と感動している。

昭和9年には、「七尾城跡」として国の史跡に指定され、現在は「日本名城百選」の一つに数えられている。さらに平成19年3月、「美しい日本の歴史的風土準100選」にも選定された。

能登畠山家と畠山文化

能登畠山氏は、満慶を初代として11代義隆まで歴史を刻んだ。今年は、満慶が能登畠山家を開統(※1)して600年の節目の年にあたる。

3代義統のとき初めて七尾に下り、7代義総の治世には、「能登畠山文化」と称される

文芸活動が七尾城下町で花開き、公卿、歌人、連歌師、禅僧などの京都の優れた文化人が相次いで訪れた。

義総は文人大名ともいわれ、香道御家流の流祖であり、古典研究の第一人者として知られた公家の三条西実隆(1455〜1537)に深く師事して、「源氏物語」「伊勢物語」「古今和歌集」などの研究に励んだ。

平成3年(1991)のシツケ遺跡(現デイサービスセンター)城山の里)発掘調査では、整然とした七尾城下町の遺構、天目茶碗・香炉など嗜みの遺物が発見され、能登畠山文化の水準の高さをうかがうことができた。

